

武家名目抄 職名部十六上 第廿八冊

度

共六十

庫	文	閣	内
五三函	四一	六〇	三六〇九一
四一	五	冊	號
類	和	書	

内閣文庫	番號	和 36091
	冊數	60 (28)
	函號	153 276



276

勘定奉行

勘定頭

勘定役

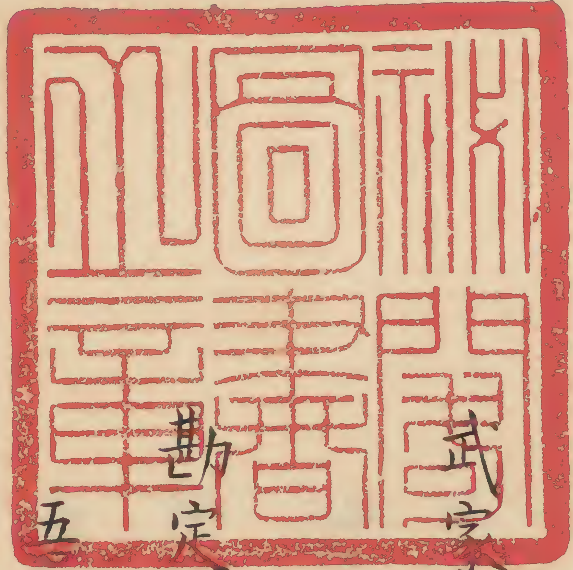
段錢惣奉行

段錢國分奉行

唐船奉行又稱唐奉行

藍作手奉行

薪奉行

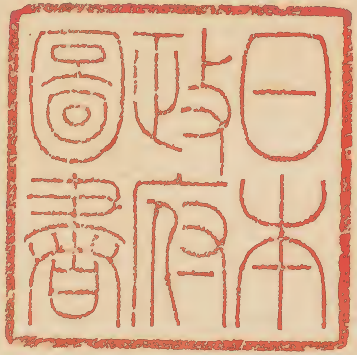


武家名目抄第廿八冊

職名部十六上

勘定奉行

五妻鏡云建久四年十月廿一日甲寅諸御



領乃貢結解勘定事奉行人等於私宅遂其節之由有風聞之間甚不可然至今日以後者於政所可致沙汰之旨被仰云々

又云元久元年三月廿二日乙酉鎮西乃貢

事掃部頭入道寂忍可令勘定之由被仰遣

云々 按寂忍ハ後京親能アリ當時京師小
ありく事とことし事存人あり

貞永式目云諸國地頭令押為年貢所由事

右押為年貢之由有本所之辨記者即遂結

解可法勘定犯用之條若無不遁者任負數

可無償之

新式目云弘安七五廿卅八箇條一水領水年

貢每年被遂結解可令所得分事一水年

貢定日限可徵納若過期日去可令不領事

按貞永式目と此條とハ職名ありと之も勘定之
事と云け給ふ事其人の職掌ありと云引と

甲陽軍濫云 信玄代惣 勘定在り青沼助之

清騎馬拾五騎足輕三拾人市川宮内助跡

郭英作守付庇惣算用聞也

又云 小田原加 青沼助之清是と馬宗十六
勢入條

騎加ち足將卅持々人也此助之清之持純

乃考能一く山川とも不替れ勘定上との

人なり信云公此中法代官の專用也
友人の内あり氏康公此處何ほと留まらる
加勢不系る次り終る處と云はれ
又云 勘定奉行 勘定奉行之人は元形義者
形義條
別たり青沼助之流は少と申事ある者をも
近身掌さるる市川之内助を何れりと
は方乃理く川をあるく之事大畧乃考く
理を指くも申すべくはらるる候

云なり跡部某作る有時々あるく是と記す
屋々々に申すとき時と申す勿論申すとき
時とあるときふくよりくお錢云人有利
右乃之人談合しく西へ員濃岩村同如ん
此大寺之河井田是助関東相換武藏堺新
田是利堺越後堺飛騨越中権名、居館と
通の助ふぬかわり出しく是是と申す
百貫の高に身糠二拾俵葉二十把おさせ

是と云く道通町人百姓十分一とられて
やきくうくする所度く乃陣りと法傳糠
業にたかく事か——種小糖業う川を
代物とく存乃百姓一返とたり上とるれと
物件とくつる是川と法云と水目利
よく人を召はくし給ふあり

由良家傳記云 慶生治久水勘定を以ハそ
其見條
身實小思案に能物ト折之減之作舟子役を

相勸は換り折く水實數金と成可_レ作舟人并
而く水代官水賄方法と小役人小玉と云々乃
あやまちなき、換ふ_レ作舟人

慶長見聞記云佐野肥後守ハ二重込ノ筒
放シ筒サケ候テ充申候是ハ秀次公衆十
リ勘定方奉行ニ召抱ラレ大坂西ノ丸御
留主ニ居タリシヲ敵追出シ申候間伏見
へ參相果ル

慶長年録云、慶長十八年七月九日、代友と
仕大久保十之清と申、勘定方才是者之石見
伊豆依渡、亦い金山幸行、依伴舟玉幸行、亦
評定元のあより加判仕たり、按大久保十之清ハ
全く此勘定幸行
ふあ、依と之とも勘定方才是者と云幸行と云け
給ふともあよりや、勘定幸行乃不職、一類せう、
ゆゑに、
のせあり

按、徳倉殿の時、勘定幸行とて、利小、没在
ま、一、事、い、あり、一、う、と、公、事、幸、行、人、乃

内少く、法、由、り、な、れ、於、年、貢、乃、結、解、勘
定、代、う、も、給、り、り、沙、汰、と、る、案、を、勘、定、の、幸
行、人、な、と、い、ひ、一、事、を、あ、り、と、い、ひ、慶、長、京
親、能、京、都、の、職、務、を、持、せ、一、時、と、西、武、の、乃、貢
勘、定、と、つ、き、と、り、一、より、關、西、に、乃、貢、を、考
か、一、と、り、つ、き、と、る、事、と、成、ふ、乃、勘、定、六
波、羅、の、あ、探、頭、を、幸、れ、一、後、と、云、波、羅、を、り
人、を、考、と、り、を、あ、り、一、ぬ、一、是、利、殿

の時ふも隠倉の例を造りしめや刑小勘定
まひの名は後あられりしなりありあり
勘定まひといふ、全く職名とありく常日
不遇の職となりしハ大名法家よりありしと
おぼゆまはるるあつく幕府ハ玉用と給さる
あつ政取ハ有司の法ささるふある代法家
みくたに勘定まひといふを定補して米貨
己下あつく乃玉用と毎さるる事なりと造る

うれ、常のちひとありくさ方ハ法さるる
屋うやくうけたるある事職とありしなり
——
今の世若お老の務ま方とてうも後さるる
との隠倉是利お家の時ハ結解勘定まひ
乃くくわ
おまひり

勘定頭

勘定役

里見義康分限帳云横山将監貳百石量
不奉行并勘定改堀内庄左衛門勘定役高

五拾石之橋新右衛門五拾俵内藏共勘定
元福系旨七高五拾石勘定

按勘定段ハ勘定奉行の御名あり依り勘定
奉行ある事と勘定段ハ一政ある事
あり奉行なる事一職掌とあり依り之
うたゞ一勘定段ハ勘定段の御名ハ一人ハ
指揮小意一事務結解勘定とあり考あり
され共勘定長せ一輩とえし一職又

居る事あり一考あり
勘定北庄分
限段階を按
りて勘定段ハ六七百石の事一人あり勘定奉行ハ二三
百石の事一人あり一勘定段ハ一思ふに勘定
奉行は勘定奉行の内より取らる考を勘定段と
稱し一考あり一勘定奉行と稱し一考あり
あり一考あり一考あり
あり一考あり一考あり

段錢摠奉行

段錢國分奉行

吾妻鏡云弘長三年六月廿三日辛未將軍
家御上洛事有其沙汰被充課役於諸國御

教書文章一同也西海事者被仰遣六波羅
云々御教書云御上洛間百姓等所役事段
別百文五町別官駄一匹夫二人可充行至
者以二町可此外不可成民之煩但有逃散
准田一町富之輩者相觸在所可令勤其役之状依仰執
達如件弘長三年六月廿三日陸奥左近大
夫將監殿武藏守相摸守按高時つゞく辰清を以
の名ありと云ふも本文
乃ふ而も室町殿の時乃辰清を以乃職掌ありと云ふも
さうりのはたを大支物監と小條時茂を以と云ふも記

六波羅乃小方小位一南方關職多きより初より京
師の成敗を司とより武藏守とを執持小條長時を換とる
連署小條
改村あり

後愚昧記云應安五年十月十日畑庄飛脚
到來經世入道遣状當國段錢事兩使一方
松田

某一方當國住人已充催所々當庄分同先
久下新左衛門尉按松田ハ辰清を以
久下ハ古渡人あり
付切符之彼切符恒富症云々

花營三代記云應安四年十一月一日御即
位御沙汰被始行於管
領亭二日同御沙汰於御

所被行諸國段錢洛中邊土土藏別三十貫
酒屋壺別二百文云々五年七月十一日日
吉神輿造替料足事被付諸國段錢日吉社
神輿造替要脚内諸國段錢事就被下院宣
所有其沙汰也所詮召出國々大田文寺社
本所領并地頭御家人等分領悉充公田段
別三拾文急速可執進之若有難澁之在所
者守護使相共遂入部可致譴責矣次當參

輩所領事仰所務代官可京濟之旨相觸之
且領主之名字田數之分限可注申之焉摠
奉行佐々木治部少輔右筆門真權少外記
十月十日日吉神輿造替諸國段錢事不除
三社領三代御起請并地可充催之由可被
仰遣武家之旨新院御氣色所候也仍言上
如件忠光恐惶謹言十月十日進上民部大
輔殿權中納言忠光上六年十二月廿七日

山門神輿造替沙汰被執行之摠奉行人高秀親父道譽去八月廿五日他界之間依為重服延引然而依被下高秀除服之宣旨被始行之按此は高秀の服喪の始を以て神輿造替の始を以てし小蓋うけを以てしと見ゆ又云永和五年八月廿三日門真奉行日吉祇園北野神輿造營要脚事就給旨重所有其沙汰也所詮以諸國之段錢可造畢三社之神輿云々此上仰使節召出國々大田文

段別參拾文不除三社領并三代御起請符地嚴密可檢納

之若令對捍者將處罪科云交名云在所可

注申之次先度難澁所々事守護使相共遂

入部令譴責可究濟之條同前按門真ハ檢少外記あり先小依ハ

高秀と若小服喪の事とを以てせしむるはふくまうけ給ふりし事也又使節とあるは西分を以てし事なり

下引し延徳二年將軍宣下記大録常真記未と参考ししるる是なり

常照愚草之法也一服淺衣相無時々を以

庇爾を厭くしむる法々と云分之乞と云

分之在_レ所_レト中也其國_レ守護_レ内_レ知書
出_レ中_レ也一法候知_レ分或京_レ或免除之
在_レ所_レ古今有_レ之然志在_レ所_レ守護_レ内_レ
知_レ成_レスニ事書_レ一紙お添_レなりニ事書_レ
御即位要脚何國候_レ事年月日以彼要脚
附_レ之足_レ早_レ除_レ之社領_レ兵小野社領_レ法_レ五山
法塔_レ院_レ持_レ寺_レ持_レ院_レ領_レ以下_レ免_レ除_レ京
録_レ之地_レ令_レ支配_レを_レ別_レ五_レ文_レ充_レ於_レ公_レ田_レ來

何月十日以前可_レ定_レ究_レ録_レ之若_レ辨_レ混_レ之在_レ不
者_レ有_レ其_レ沙_レ法_レ云_レ領_レ之_レ交_レ名_レ云_レ去_レ貢_レ負_レ數_レ方
以_レ可_レ定_レ注_レ中_レ之_レ矣御即位ニカキテス如_レ付_レ認_レく_レに
必_レ分_レ乃_レ在_レ所_レ一人_レ判_レ之_レ仕_レ也_レ是_レを_レう_レ成_レ封
ス_レル_レト_レ云_レ也_レ名_レ宗_レも_レ不_レ書_レ一_レて_レき_レ判_レ斗_レ也
さ_レく_レら_レく_レと_レ毫_レく_レ上_レ書_レハ_レさ_レく_レ上_レ事_レ書
と_レニ_レ字_レ書_レ也_レ一_レ守_レ護_レへ_レ事_レ書_レ之_レ文_レ云_レ御_レ即位_レ要
脚_レ何_レ必_レ候_レ事_レ早_レ守_レ事_レ書_レ之_レ旨_レお_レ然_レ之_レ來_レ仁

月何日に前殿重々^レ被^レ執沙汰之中不^レ定
評下也仍執達如件と書て如例式年号日
付ありて五分乃在^レ日下^レ官と判とを
仕くその時の御即位在^レ沙汰之人も口人もある
加判也如此之時も評定元之内一人同在
沙汰を仕也假令拾津二階堂等之類也如此
輩も在^レ沙汰の程く不加判之時乃改人と是
と申也一法候之知^レ沙汰或免除之地或京湊

之地事を五分乃在^レ沙汰人の方へ以^レ評定中處
流文を披見し事之時の改人へ披^レ流して評
人方と守護(と成^レ水^レ下^レ知也)之文を先^レく免除
有^レ京湊方地タル上も五分止^レ催^レ役中^レ有^レ評出
也日下より在^レ沙汰加判如常折紙之書書之程
辭也立^レ文^レ事も有^レ之^レ水^レ下^レ知^レ之^レ文を先^レく爲
京湊地と有^レ止^レ守護使^レ評^レ早^レ然^レ之^レ何^レ月何^レ日
以^レ前^レ有^レ究^レ湊^レ之中^レ有^レ評^レ出^レ也と認^レ了^レ也如^レ付

以下知をとりてを不随くを護り道行を取く
執を納也一如此之時の由倉とハ別也亦作舟
又その由倉へも納中事也又九あく法候へる
何し及と殿文字在之

季瓊日録云長祿二年六月十一日常在光
寺領丹後國守護段錢御免許之事被仰出
被準于御料所之在所被免之四年七月十
九日播州寶林寺領備前新田庄内吉永保

役夫工米京濟之御奉書雖被成下彼守護
難澁自寺家以狀嘆申之故遵行難澁之上
者重可被成京濟之御奉書之由被仰出赤
松次郎法師方同前被仰也即於殿中命于
國分之奉行飯尾齋藤四郎衛門方也為支
證自寶林寺本庵之狀以之伺之即遣于奉
行方也

按赤松氏を播
州の守護なり

赤松親基記云文正元年七月十九日大嘗

會方段錢分 由中丞飯口左 布野州止出

江之弓彼分為 熱車以 中之

蜷川親元記云文明十年六月廿日庚戌法

必段錢熱車以 事松田丹後守與 法 作 身之

貴及以 事 以 使 堤 之 部 法 作 進 之

延德二年將軍宣下記云將軍宣下段錢石

見國分誦左大分也為 使 為 追 加 可 申 沙 汰

之旨公人奉行明應四三廿七日被相觸之

去年依令月迫當年被相掛之國在當

國并藝州兩國使節飯尾中務大夫行房下

向也遠州使節誦左大貞說當月下向也要

脚到來者可被用御參内始料云々

大館常興記云天文七年九月廿九日越前一之

以使事五之事以松丹也然 小 事 以 中 小 初 き て

へち於 事 以 を 為 下 に 一 を 矣 西 月 換 小 存

以旨内松丹存分也云々依方より以越中之旨

之服各法合仍松田九郎と云く如此様辭誓
州へ九郎所出の事の中法知事より申立ての旨
版考九郎所下しり於身もつて祝着の申立
中之云々

大館文書云云元服の儀を秋葉某目出度
存に就て高岡版談事の中身は成り下
知に雖も然後前々中身候事は此旨可然候
詔に披露の旨に謹言五月六日大館左清

依及具教

按具教云伊勢國司なり已上
十條之京都將軍家の有司あり

季瓊日録云長享三年三月六日勝田地頭
方段錢相懸條以兩官連署兩奉行藥師彦
四郎鳥井十郎左衛門尉方遣了

多聞院日記云永正四年十一月十七日今
日於修南院家勅井修理進官并以下各系
寺門成并此造宮版談之事候御了修理
進懇申文中平廿四日此造替版談并寺門

領可在運上由赤沢方出狀了此造智限淺
并寺門限米寺社願此事各無相造可也相
渡第一於遠亂之在取之給人可相改者也
乃謹云十一月廿四日和州法給人心中
赤沢長經判在十二月二日棟別淺之内五十
貫文赤沢方へ被造了此内之十貫赤沢貫
并二日就此造宮限淺奈良成之候自法方
使出此合方在之赤沢方より四郎之清總

積自官符村并治部巫自寺門取高寺苗并
良旨取仕今日此合方より自寺家多聞
院十二月四日此造宮限淺之奉行より總
積高林願宗道兼村并於神龍院舎合毎日
別限淺運上并限米等沙汰云々限淺負敷
事百姓没卅二文限米同一并充可出之中
切符入了不簡間田余田惣田敷を惣了先
納高納方以百姓没斗也按造高と八喜日社の造替
を以たり友符と八筒井

氏の本
なり

嚴助僧正往年記云大永五年正月廿五日
棟別奉行九人罷趣云々今度國中棟別自
右京北被相懸之寺町三郎左衛門波々伯
部兵庫上原神兵衛飯尾肥前石田四郎兵
衛河田右衛門大夫齋藤三郎衛門井上中
務長澤越前宇津御境内同氏人衆罷下也
按棟別の本は右京北にありりとの中ハ右京北にありり
との右京北を細川言ふなりとの條に法家ありり

令せしむるハ一々幕
府の職負みえあり

長曾我部家括之中五郡諸奉行一版米大
奉行松本寺町隼人 一 同去々郷奉行を 一 版
米子頼孫を清演田仁右清一 拾分一悉英
門亭請取奉行大黒半左清一 石本六郎左
清一之谷介左清一 令浪濤奉行地蔵院
石本六郎左清一 按松本寺地蔵院ハ法師より版米
令浪濤の奉行をせしむるあり
又云幡多郡諸奉行一版米令浪濤十分一

幸以迎復太玄清溝瀆苑之巫

土佐國横濱福富氏所藏文書云辰米之事

萬而如定一日と無相遠相湊も如堅固遂

算用もへくも少も緩く相意得又不厘候と

も仕なり則時^レ加^レ成敗も異^レ如^レ法度^レ候^レ

可相湊者也十一月十八日表津加及米幸

以福富堪右御門黒岩治郎^{々々}花押^{按こ}

條も長曾我部家の有司
みくた小定^{々々}幸^レなり

按辰淺とて天下小重事ある時小南^{々々}

之費も小給^{々々}とて法玉の田高^レり課^レ事

辰則小克^{々々}とて^レ亦乃湊^レとつ^レ常^レり重

事と^レあ^レ此即位大嘗會造内程及物軍宣

下物軍家上洛又大社造管等なり伊勢神宮の

辰丈造米の代も辰淺を^レ出^レく^レ毎^レ事^レ

あ^レ中^レ辰^レより^レ始^レあ^レひ^レなり^レ至^レ極^レ乃^レ重^レ事^レ六

法玉小課^{々々}と^レ法^レ玉^レの^レ事^レハ費用の

多少小准一筆一玉二玉小も深まふたつ中
あり 後小ありくハ本不願家又ハ地政の業ふと私よ
深海と深するこもあり今乃せり用金と
いふく 凡深海と深する時より國をも深し
人にも海く収納せしめあり 其の輩茂
國分事深もよまきして文と若老のきり一人と
しと事茂統願とむらとを深海熱を
ゆといふ 總倉殿の時より執権連署の二人法
教書と法ふふりくたきと考きし事あり

川小深海を定らと一と中と文と
然れとも名目乃なき乃くありま事ふ高
すれを人々ありとありあり深海
をゆ乃名を正しく是利敵の時より事
起りたる一又一國の守護一玉の願之等
幕府に命りよ事く深海と收むる時事と
策と家の人と私小深海を採別をゆ
たるとよる事あり 採別をゆハ一家別よ

収むる意ふよりく名つけしなり候後小棟
別候後棟後後等乃稱あるもくおし
長曾家部家おく候米令限まはり
私の没けし一雨くあまことま名のおふ
將軍家の名目よすねるあり今の世に上洛社
系韓人未聘ふとのせり至後令とせり
事あはる古の候後乃名強とみえり

唐船奉行 又稱唐奉行

康富記云寶徳三年八月十三日己卯或語
云琉球島船人^高去月末著兵庫津之處守護
細川京兆早遣人彼高物撰取未渡料足之
間先々年々料足未進物及四五千貫無返
弁又賣物抑留為島人難堪之由申之間自
公方被^下遣奉行三人^三布施下野守飯尾与
被^左糾明之處被押取之物自京兆未^被返依
之奉行未上洛云々

又云享德三年十月十五日癸巳是日奉行
兩人飯尾美濃守同孫右衛門尉等為公方
御使下向兵庫自唐飯朝之船荷共為檢知
也

季瓊日錄云寬正五年五月廿八日就渡唐
正使并居座箇條申狀与伊勢守判之致披
露以後于唐船奉行飯尾大和守於殿中渡
之正使天与和尚居座妙增都聞紹本都寺

依大内方所申來六月可赴于九州地之由
以飯尾大和守被仰出也即命之六月十五
日為可使于大唐釋王寺石硯自諸五山五
百面可進上之由被仰出也但以價直可被
召之由伊勢守并唐奉行飯尾大和守申之
即觸之等持寺献十二面硯也七月四日來
八日唐被遣之發軫丹并車警固出立錢疏
紙并箱正使并居座可被懸御目等事与唐

奉行飯尾大和守語之云々
又云文正元年八月六日就琉球入貢點檢
之事大槩一日諭其點檢方樣被惠彼者而
頻々有往來則可乎然則彼者以內點檢入
鹿入細以註文可獻之若此外有漏泄之物
則堅可有御成敗之由以證據可申也又其
內有御用物則可被召云々懇々以伊勢守
所披露之仍此旨伊勢守可命琉球之奉行

飯尾大和守之由被仰出仍達之即伊勢守
於殿中召飯大命之明日可行此命云々

兼友親基記云文正元年七月廿八日琉球

人系洛

當御代六
今度目

号長史於御寢殿庭前三

人懸涉目

三評
申了

庭敷席一進物料足一千貫

其外如先々一懸御目三人進物種々自小

侍所元連之種為奉行執次之進上

按元連ハ
飯尾大和

守之種々飯尾
紀前事ナリ

島津文書云琉球國渡海船事先度被成奉
書之處御請到來殊上使就龍首座言上之
趣具以被聞食平所給於子細者追被弘明
之堅可有御成敗至泉州小嶋林右郎左衛
門尉堺湯川宣阿小嶋三郎左衛門男和等
者就渡唐被仰付之上者以別儀嚴密加下
知無其煩可被令彼渡海之由所被仰下也
仍執達如件文明六年九月廿一日嶋津又

三郎及加賀守 花押 ○按嶋津又三郎
之薩摩日向大隅之國の

守護嶋津武久あり後之薩摩守小紅紙
加賀守大和守ハヨリ飯尾氏なり

慶長年録云慶長十七年三月廿三日岡本
大八と申者長法を以有馬修理を日取取
持内くしく申ハ金子を多く指越り老成へ
遣一又出陣の女中一遣一九州之内禍語知
り顔分二郡を申文あらしきと傳りんと
志ふし一令限數多出是成れらく一急

沙汰もあく不致返答の同公事又成大八
負あく則亦一日小阿部川系はく火あり
此作有法人見物ふくまぬとのをち大八
死時中換ハ有馬修理と大悪あり唐船
系を以小長谷川長谷川を有馬修理
やみ打よの仕由我等にお流中不分明也と
中しく死中の有馬修理も囚人よく大久
保石見よ此作有甲州へ長谷川家襲可有

と也 按ち小唐船系を以とあるハ今の長谷川の事あり
寛永の頃ハ長谷川町を以ありと云り室町家ハ唐船
を以とあるハ少く矣あれとも唐船と
交易せるはるなるを云りありの云

按唐船を以と明もあき琉球もあれを
唐く矣より船もする所の方物と拾網一又
あきより船もする書牒ふ物の事等と
つりより高賈交易の事と云り物もあき
ちり明も寛永年中小鹿苑院殿通伝と云
しより使人の往來絶ふ事あり常小島山乃

とまうもぬり子孫永く六乃職を認ね
ふへし。是利敵の時ふりくふくありん
洋な。は長官我部あしく細波まゆとくふ
藍の國波濤をぬるふあしく作まゆを
不職と吳あふうくふれとお頼をうつふあは
たうり附せよ

薪奉行

吾妻鏡云延應元年五月廿六日乙未前武

州為禪定二位家御得脱被積作善事年々
歳々未緩其中於彼法華堂之傍被建温室
令結番薪等雜掌人毎月六齋日可浴僧徒
之由有沙汰 按う小薪等雜掌人との法華堂より
つあられし有目少く令く幕府のまゆ
人まあまゆもゆりある
つうさちまゆりのせり
太閤記云 後吉原薪信長公常に民の飢寒を
奉り條 憫む思百欲賑民間あふ炭薪の費一とせの分
にほとふうとまゆ小同あハふ石有條ありと

答へもふいふと思ふらん幸はをかしと村井小
尾師舟一と浪波とさしつちんとも用ひあそび
後吉郎をふく今日より炭薪の入用汝沙汰一
能よ汁を一ある年裁播波一て見合ふ浪舟一え
翌日より自ら火を焚多く困極と穿鑿令一
一月の分を勤無一一月の分を勤一と云ふ石三
分一と石及程多れハを年石斗ハ云々一と云
費益もあは事なりと云秀吉ハ悔一翌年

正月廿日炭薪之費往年之勤無如此之旨
此うこそと云うく中と一ハ此氣も且宜々
と云ふりて秀吉中とけらる地むくも護ハ山小
尾師ハ炭薪海邊ハ云便ハ吹切く貢一と云
届う小園え中ハ云此ハ玉中の里く大木生茂
と云り一村より一本は貢一と云浪舟あそ
びと安は事一と云者魚一と云中と一と云
免と角も能よ汁一して中一雖然百姓ホ不

痛極小價をきくへき旨はるるに依くそくに
買をきりりり後友吉郎と免し出し汝を
新をゆあんふきん事と免し駿馬と塙車に
若し免大材と小事小用とに等しきと多りむれ
させぬは吳多ゆふははるる
長曾我部家捨之幡多郡諸奉行一船并船
頭水之材本薪奉行池之郎右海門池太郎
と清

又云中五郡諸奉行一清名田散田公用奉
行欠万次郎と清由百姓丈九遺宮地平と
清炭薪田平右清の

按新をゆふ新を切りて屋訓へ給とる
つとさあり世職名の所見多しとるかハ清家
とる小基不方贈方等少くね沙清と
あともやうにたあへてあへてへ

武家名目抄第廿八冊

藤原弘貞書

廿八之廿九

